

ものづくり産業を支える仲間たち⑬

JAM—コマツ栗津工場

今回は、コマツ栗津工場を訪問した。JR北陸本線の栗津駅近くに敷地面積71万平方メートル、東京ドーム約18個分の広大な敷地の工場がある。

また、1駅隣の小松駅前には、産業機械（プレス機械）を開発・生産している小松工場もあり、小松市ではコマツが主力企業であることが伺える。

ご存知の通り、コマツは国内建設機械メーカーとして有名で、工場は国内に10箇所、その中でも栗津工場は同社の一般建設機械および路上走行建設機械の主力工場である。（従業員は約2500人）

栗津工場の主力製品は、中小型建設機械および建設機械の心臓部であるトランスミッション（変速機）である。トランスミッションは、一極集中の開発・生産拠点として、グローバル生産に重要な役割を果たしている。

中小型建設機械として、油圧ショベル（アタッチメントの付け替えによって様々な用途に使える建設機械。下向きのバケットを取り付けてバックホーとして使うのが最も一般的）、ブルドーザ、ホイールローダ（ホイール式トラクターショベル。土砂をダンプカーに積み込む時に使われる）、モータグレータ（道路建設機械）などを開発・生産している。また、トランスミッシ



油圧ショベルの組立ライン



ホイールローダの組立ライン

ョンは、速度やエンジン回転数に応じて変速比を自在に変える機能を備えた変速機であり、坂道やでこぼこ道、荒地や造成地など悪条件の工事現場で稼働する建機にとって、非常に重要な部品である。

コマツ（小松製作所）の創業者である竹内明太郎氏は、竹内鉱業株を1894年に設立、鉱山事業で得た資産を機械工業発展のために出資し、1917年石川県小松市に小松鉄工所を設立し、鉱山用機械生産を開始した。

1921年5月に小松鉄工所が竹内鉱業株から独立し、株小松製作所が誕生。

創業者である竹内氏の理念は『工業技術の革新』、『人材の育成』、『世界への雄飛』の3点である。この創立の理念が今のコマツの遺伝子（コマツウェイ）として、技術革新と技術・品質第一主義、目を世界へ市場は世界をモットーとする現在のコマツの伝統精神に息づいている。

主要部品（エンジン・トランスミッション・油圧機器などのコンポーネントも含み）は社内工場で生産し、世界中の工場に供給している。

特にトランスミッションを構成する部品は、栗津工場で一極集中して開発・生産し、日本国

内の工場のみならず、全世界のコマツの生産拠点に供給している。

現在、栗津工場では、中小型建設機械の生産は、月産約1500台で、機種数は約300モデルに及んでいる。

組み立てラインの特徴としては、ライン生産（メインアSEMBリー）とセル生産（サブアSEMBリー）を組み合わせた高い生産性の『複合生産方式』によって多品種少量変量生産（49モデル105仕様）を実現していることも驚きである。

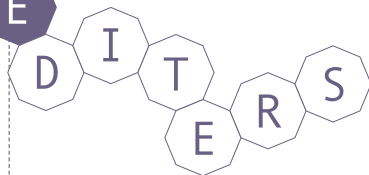
また、品質保証システムも徹底しており、QAマンによる検査指摘項目の組立ラインへのフィードバック、社内マーチャリング（部品挿入）、専門ライン検査員による組み立て中の全車両の三重チェックを行っている。

表紙イラストは、建設機械組立工場における上部旋回体と下部走行体部分の組立作業である。

コマツのキャッチフレーズに『ダントツの夢』があった。『ダントツの技術』が、それをかなえた』とある。北陸人の地道な粘りと根気が世界のコマツを担っていることを肌で理解できた。（美）

SPRING
issue
[春号]

E from



◆今号の特集では、「ものづくり現場から」シリーズの第2弾として「団塊雇用」を取り上げた。

「2007年問題」と話題を呼んでいたが、いよいよ本年4月から戦後ベビーブームに産まれた1200万人におよぶ「団塊世代」が、60歳を迎え、労働市場から退出を始める。ものづくり企業各社も、技術・技能の中核である団塊世代が労働市場から退出することを受けて、技術・技能の伝承への取り組みを強化している。今号では、ものづくり3社の伝承システムを紹介すると共に、団塊OB世代の活躍ぶりを紹介する。◆今、『ワークライフ

バランス』という言葉が流行っているが、非典型労働者が増えている中で、そんな甘いことをとを思われている御にも多いかもしれない。しかし、定年退職後の長いセカンドライフのことを考えると、忙しい現役生活の時から、労働と生活の調和に地道に努力して取り組んでいかないと味気ないセカンドライフになってしまうのではと心配する。遠いと思っていた老後が近く感じられた。（美）